

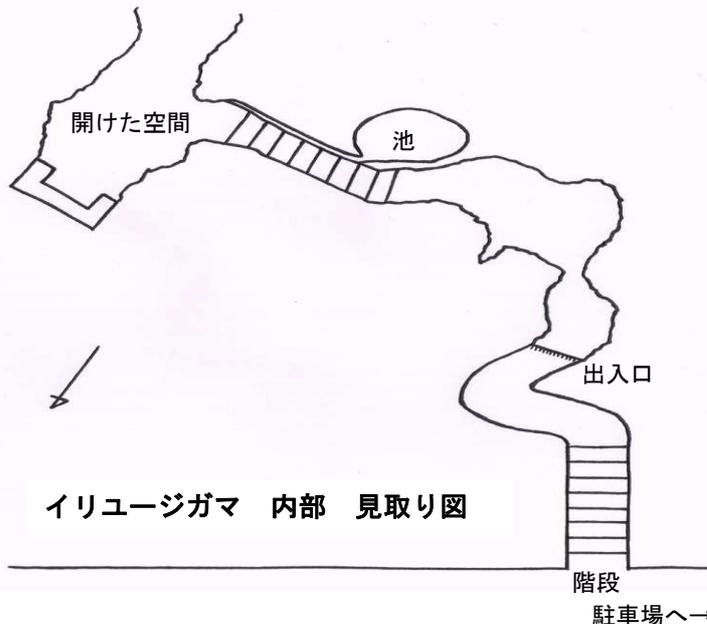
イリュージガマ 事前学習用資料

「太平洋戦争と沖縄戦」

1941年12月8日、日本軍の真珠湾攻撃を皮切りに、太平洋戦争の火ぶたが切られて落とされた。当初は優勢の日本軍だったが、連合軍との物量の差は大きく、徐々に劣勢となってゆく。1944年夏には「サイパン」「テニアン」「グアム」などの太平洋の島々を米軍により占領され、1945年4月1日に沖縄本島への上陸を開始した。

日本軍は、沖縄を本土決戦の時間を稼ぐための「捨て石」として作戦を決行する。

結果、日本で最大規模の地上戦となった沖縄戦では、「鉄の暴風」と呼ばれる程の砲弾や銃弾が飛び交い、多くの地域住民を含む20～24万人が戦死した。



「イリュージガマとは」

イリュージを漢字で書くと「西與儀 (にしよぎ)」。與儀氏の土地であるという背景から付けられた。

1945年2月、具志頭村役場の重要書類が置かれた。米軍が沖縄本島に上陸する直前、1945年3月下旬に沖縄南部を襲った空襲の際には、周辺の住民らがこのガマに避難した。住民らは1週間ほどで追い出されたとみられ、歩兵第89連隊第5中隊の本部壕に使用された。沖縄戦末期には第二十七大隊第一中隊の負傷兵約40名の他に、地元住民も避難していた。

「イリュージガマと沖縄戦」

1945年3月下旬、住民が避難していた時、現在の入口反対側がダイナマイトで開口され、海に向かって高射砲が据えられた。住民の避難場所と高射砲の間の仕切りには大砲の弾が使われ、「誤爆の危険がある」という理由で住民らは追い出された。沖縄戦の末期、残存将兵は大度の本部壕へ合流せよとの大隊長命令が出た際、歩けないほど負傷した兵士2名が自決、自決を拒んだ1名が射殺された。



イリュージガマ入口



壕内の様子

「スパイ容疑による住民虐殺」

沖縄戦の末期、壕内にひとりの婦人が迷い込んできた。婦人は沖縄の住民で、小ざつぱりとした衣類を身につけており手鏡を持っていた。当時手鏡を持つ者は、信号を敵に送る可能性があるとして注意されていた。軍民混在の沖縄戦では、住民が日本軍の内情を米軍に漏らすとの疑いも多く、沖縄方言での会話がその疑いを助長。スパイ容疑で多くの住民が虐殺された。イリュージガマに迷い込んだこの婦人も虐殺された。

(NPO法人 自然体験学校 作成2021年 4月)